



👁️👁️ みどころ

徳川時代の農民一揆は多い。『郡上一揆』（00年）は有名だが、岡山県真庭地域で起こった「山中一揆」を知ってる？

『スパルタカス』（60年）は大スペクタクルシーンと、ラストの「I am Spartacus!」が強烈だったが、本作は、「逃げた男」と「闘う男」の2人を主人公にした人間ドラマ。一揆の鎮圧は想像どおりだが、その後に見せる本作の強烈なメッセージとは？

それをしっかり考えながら、自主的な映画作りの意義を再確認したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 「一揆の映画プロジェクト」の上映会に参加■□■

本作は、岡山県真庭地域で起こった「山中（さんちゅう）一揆」をモチーフとした時代劇だが、それを監督したのは山崎樹一郎。また、そのためのヒト・モノ・カネを準備したのが「一揆のように映画を作ろう!」を合言葉にした「一揆の映画プロジェクト」だ。こんな映画が一般の宣伝に載ることはありえないから、12月6日に中崎町ホールで実施された上映会の連絡を受けたのは、シネ・ヌーヴォの支配人である山崎紀子さんから。そこで、山崎樹一郎監督が山崎紀子さんの弟さんだということを聞いてビックリ！土曜日の午後4時からの時間帯は私にとってベストだし、場所も事務所から自転車ですぐのところだから好都合だ。

事前に参加することを伝えたら、当日会場に着くと、そこは「一揆の映画プロジェクト」のメンバーを中心とする約40名の人たちがグループに分かれてディスカッションをしていた。私たちのような「一般参加者」は、産経新聞の映画担当のTさんを含め数名だ

けだったが、上映終了後は監督を交えてのディスカッションにも参加。さらに、その後はカレーライスを食べ、ビールを飲みながら、山崎監督への取材にも参加し、楽しくかつ有意義な時間を過ごすことができた。

■□■山中一揆とは？まずはウェブでそのお勉強を！■□■

今年のNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』も、いよいよラスト。徳川家康が黒田官兵衛の望みだった「戦のない、平和な社会」の建設に乗り出すところで終わりになるはずだ。たしかに265年間も続いた徳川時代は、大名間の武力による争いはなかったが、その反面、武士（支配者）に抑圧され、苦しめられる農民一揆はたくさんあったようだ。白土三平の『カムイ伝』（小学館『ビッグコミック』刊）を映画化した崔洋一監督の映画『カムイ外伝』（09年）は、土農工商という厳格に身分格差が設定された時代の中、さらにその下にある「下忍」「抜け忍」という立場に追い込まれた青年カムイに焦点をあてた（『シネマールム23』187頁参照）が、このような例はごく例外だ。

しかし、ウェブサイト「浄土宗撰取山念佛寺とフォルクローレ」を読めば、江戸時代にはたくさんの農民一揆が起きていることがわかる。一揆の種類は①不穏、②愁訴、③越訴、④逃散、⑤強訴、⑥打ちこわし、⑦蜂起、に分かれるそうだ。しかして、本作がテーマとした山中一揆は、1726（享保11）年に津山・松平藩が治める美作国の真島郡・大庭郡（現在の真庭郡）で起きたもので、その詳細は上記のウェブサイトにとまめられている。本作を読み解くには、この勉強が不可欠だ。

■□■2人の対照的な主人公と2人のリーダーに注目！■□■

本作の主人公は小作農民の治兵衛（中垣直久）と地主の新六の2人。身重の妻たみ（梶原香乃）と暮らす治兵衛は、「年貢がいくら厳しくても仕方ないじゃないか」と何でも現状を受け入れてしまうノンポリ派。それに対して、学もあり、一時はサムライになろうとし



ていた新六は、情勢の動きにも敏感だから、「今こそ一揆を」と密かにその策を練っていた。ちなみに、新六には幼い一人息子の喬之介がおり、その息子に剣術の真似事を教えていたが、そんなことをして何か意味があるの？本作は、何ゴトも対照的なこの2人の主人公がストーリーを引っ張っていくので、それに注目！

他方、本作に登場する一揆のリーダーは徳右衛門。「大塩平八郎の乱」では大塩平八郎が有名だったし、神山征二郎監督の『郡上一揆』（00年）では、緒形直人演じた定次郎が有名だ。ちなみに、1884年の「秩父事件」を描いた『草の乱』（04年）は、農民一揆というよりは自由民権運動の色彩が強いものだった（『シネマルーム6』181頁参照）。それらに比べると、さて徳右衛門が見せるリーダー像は？

また、宮崎駿監督の『もののけ姫』（97年）には、踏鞴（たたら）製鉄（製鉄反応に必要な空気をおくりこむ送風装置の鞴（ふいご）がたたら（踏鞴）と呼ばれていたためつけられた名称）に従事するたくさんの職人たちが登場していた。しかして、本作でも、この地方が「製鉄の中心」であり、製鉄集団の組織（蹠蹴取り、炭焼き、きこりなどの組織）が存在していたそうだが、本作では木地師（きじし）集落に住む「山の民」の姿が描かれる。そして、スクリーン上では新六が、山の民が農民と団結して一揆に加わるよう、「天狗状」をもって山の民のリーダーとの交渉に出かけ、何とか「統一戦線」を組むことに成功する様子が描かれるが、さて、その後の現実
は・・・？



■山一揆における6項目の要求とは？その受入れは？■

農民と山の民による山一揆が藩に対して要求した「6項目の要求」は次のとおりだ。
すなわち、

- ①年貢の未納分の14%は納入を免除すること
- ②四歩加免（しぶかめん）は免除すること
- ③大庄屋から借りて払った年貢米を免除すること
- ④米以外のいろいろな名目の税金（諸運上金）を廃止すること
- ⑤藩が任命する大庄屋・村庄屋を廃止して、農民が選んだ状着（農民代表）を置くこと
- ⑥大庄屋・中庄屋・村庄屋に与えられた特別の権益を廃止し、所帳簿を農民に渡すこと

「所詮、百姓どもの一揆」とはいつても、3000～4000名の農民と山の民が、手に手に猟銃、竹やり、鳶口（とびぐち）、鉞（まさかり）などを持って武装蜂起すれば、それは一大勢力になる。したがって、大砲や鉄砲で武装した藩兵がこれと真正面から衝突すれば、双方に大きな犠牲が出るのは必定。ウェブ情報では、かなりの激戦を経た後に「6項目の要求」をめぐる藩側と一揆側で交渉が行われ、その結果、上記④以外の要求を藩が受け入れたと記されている。その結論は本作でも同じだが、予算不足のためか、本作では農民・山の民VS藩兵との武力衝突の様子が全く描かれていないのは残念。

他方、本作では山の民の要求であった④を徳右衛門が勝手に取り下げて、全体交渉を妥結させたことに、山の民のリーダーである万造が怒り、山の民だけで独自の過激な行動に走ることになるので、それに注目。これではまさに藩による一揆分断の狙いに徳右衛門がまんまと乗ってしまったことになるが、上映後の監督との話し合いによれば、これは必ずしも史実ではなく、山崎樹一郎監督の独自の解釈というから面白い。

■鎮圧の中、2人の主人公の生きザマは？■

『スパルタカス』（60年）では、カーク・ダグラス演じる剣闘士・スパルタカスに率いられた奴隷たちのローマ帝国に対する反乱の様子がスペクタクル性たっぷりに描かれたが、本作では予算の都合もあり（？）、徳右衛門率いる農民たちと万造率いる山の民たちの一揆はあっけなく鎮圧されていく。したがって、本作にスペクタクル性を求めるのはムリだ。その結果、本作では一揆が鎮圧され、徳右衛門も万造も処刑されてしまう中での治兵衛と新六の生きザマが焦点になっていく。

新六はいったん治兵衛と共に山中からの逃亡を図ったものの、徳右衛門や万造、そして共に蜂起した仲間たちへの責任感もあり、結局戻っていったから、藩から敵罰を受けることは必定だ。それに対して治兵衛は、自らの顔を石で叩きつけて顔面を変え、右目を潰してまで山中からの逃亡を図ったから、ある意味で無謀なものだ。これは「武士にあるまじき行動」だが、もともと治兵衛は武士ではなく小作にすぎないから、誰からもこの生き方

に文句を言われる筋合いはない。しかし、山中に置き去りにしてしまった妻のたみと、生まれてくる赤ん坊は、そんな父親のことをどう思うのだろうか？

本作冒頭には、右目に眼帯を巻いた治兵衛が1人雪の中を歩くシーンが登場するが、これはどうもあの山中一揆から7年後の姿らしい。今、治兵衛は再び山中に戻っているようだが、さてそれは何のため……。

■□■ 検証すべき論点その1 「矛盾」 ■□■

私は、津山市中央街区市街地再開発組合の依頼を受けて、アルネ津山の再開発を中心とした再開発問題について、賦課金訴訟（総会決議無効確認訴訟）や再開発組合の破産申立事件等の全国初の裁判を担当し、いずれも所定の目標を達成した。その事件処理のため何度も津山に出張したが、その際、本能寺の変で織田信長に殉じた森蘭丸の弟である森忠政が藩主となって治めていた津山藩についていろいろと勉強した。そんな私にとって、大阪生まれだが、その後ゼロから食べ物を作る農業を岡山県の真庭で始めて7年、農業を営みつつ監督業に励んでいる山崎樹一郎監督は、山中一揆と津山藩の歴史について詳しく調べていたから、上映終了後の彼の話し合いは興味深いものだった。

その中で私が「検証すべき論点その1」と考えるのは、「矛盾」という言葉とその概念だ。7年ぶりに山中に戻って妻子と再会し、さらに病床に臥している新六と再会した治兵衛は、大声で「矛盾」という言葉を連発する。そこで治兵衛は「生きて死んで、生きて死んで……」と叫び、さらに「あんな一揆ができたんやから、何なりとできよう！」と叫ぶわけだが、さてその意味は？私は「矛盾」という言葉は、ヘーゲルの弁証法や、毛沢東の『実践論・矛盾論』（岩波書店刊）等ではじめて出会う言葉や概念だと思っていたから、江戸時代の日本人、しかも何の学もない小作人の治兵衛がそんな言葉を使うことにビックリするとともに、違和感を覚えた。しかし、山崎監督の調べたところでは、そうではないようだ。それを踏まえて、本作にそのようなシーンを取り入れたわけだが、さて、「論点その1」についての、あなたの見解は？

■□■ 論点その2 「きんきらきん」と「かんからかん」 ■□■

本作は、ラストを迎えようとする中、スクリーンが突然アニメ調に切り替わり、いかにも寓話的なストーリーが展開されるので、それに注目！それとともに、治兵衛の主張は「おかしい世の中じゃ！」という具体的な内容に踏み込んでいき、「きんきらきん」が干上ってしまうと「かんからかん」に変わってしまうという、わかったようなわからないような、しかし何かと含蓄の深い主張が展開される。

したがって、それを「検証すべき論点その2」としてしっかりと考えたい。イカの干したものがスルメだが、イカの干上がったものは、さて……？「きんきらきん」と「かんからかん」の意味するものは……？

■ラストに見る強烈なメッセージをどう受け止める?■



本作は冒頭、ゆっくり回る何かの映像がしばらくの間続いていくが、この映像だけでこれが回り舞台の下の方であることを見抜ける人は少ないだろう。しかし、治兵衛と新六という2人の主人公の物語

の結末が見えた後、舞台を回して半分ずつ交互に入れ替わり、現代に生きる父と娘の姿が登場してくると、「なるほど、冒頭のシーンはこのための布石だったのか」ということがわかってくる。

原田芳雄の遺作となった阪本順治監督の『大鹿村騒動記』（11年）は、村歌舞伎の舞台をめぐる描かれるドタバタ(?)の人間ドラマだった(『シネマルーム27』224頁参照)が、それと同じように本作がテーマとした1726年(享保11年)の山中一揆も、大きな歴史の流れからすればほんの一瞬の人間ドラマにすぎないはずだ。本作では、回り舞台の上で、男は自分の娘に対して「想像するんじゃ!みんなのことも、お前のことも」と教えていたが、さて、そのメッセージの意味するものは?

「スパルタクスの反乱」が一時その勢いを誇ったのは、本作には描かれていないものの、史実として存在する山中一揆における農民と山の民の連合軍が誇った勢いと同じ。しかし、スパルタクスの反乱軍が、ローマの大軍団との決戦で敗れると、ローマ軍はスパルタクスさえ差し出せば他の奴隷の命は助けると約束。ところが、奴隷たちはスパルタクスを差し出す代わりに、次々と立ち上がり、異口同音に「I am Spartacus!」と叫ぶシーンが同作のハイライトだった。したがって、そこに込められたメッセージは明確かつ強烈だった。しかし、本作のメッセージは強烈ではあるが、多義的で人によって受け止め方が違うことになる。山中一揆の歴史的な終結ぶりは前記ウェブサイトを勉強すれば明らかだが、それをテーマとした本作の強烈なメッセージを、あなたはどうか受け止める?

2014(平成26)年12月12日記